

アルテスネイトによる臨床例(1)

脳腫瘍

アルテスネイト製剤で治療を受けた「神経膠芽腫の症例報告」

患者は31歳男性、2016年夏から頭痛、嘔気あり。2016年12月に名古屋セントラル病院で右前頭葉の脳腫瘍と診断され同月同病院で手術施行。神経膠芽腫(4期、余命6ヶ月)と診断され、2017年1月から化学療法開始。

化学療法は、テモダールとアバスタチンを使用した。放射線量も併用し 合計60gy照射を行った。

化学療法については、倦怠感、悪心・嘔吐などの副作用があり、テモダールを初回42日間服用して中止した。

2017年10月から2018年2月までの間、名古屋市の木村病院で自由診療にてアルテスネイト注射薬を用いて、週1回の点滴治療(1回に180mg:60mg×3バイアルの投与)を施行した。

その後、手術を受けた名古屋セントラル病院で定期的に、頭部MRI検査施行しているが、再発の兆候は認めていない。今回悪性度の高い脳腫瘍である膠芽腫に対し、標準治療後の治療として、アルテスネイトによる治療を行ったが、再発を認めず、アルテスネイトの有効性が示唆された。

[追加報告]

治療終了後5年余り経過したが脳腫瘍の増殖はない。MRI検査は4ヶ月おきに実施している。

現在治療は何も行っていない。本人は元気に仕事・スポーツなど行っています。

医療法人桂名会 木村病院 木村 衛

第二回 日本先制臨床医学会 学術大会講演抄録より抜粋。

アルテスネイトによる臨床例(2)

大腸がん

56歳主婦のSusanは腹痛と排便習慣の変化に気が付いた。X線検査でバリウム注腸により典型的な林檎をかじった時に残る芯のような形(apple core appearance)(右図)が見られ、Susanの大腸癌が判明した。Susanは大腸癌の外科医を紹介され、そこで結腸から癌を取り除く手術の必要性を聞かされた。

しかしSusanは、手術を受けても再発するのではないかと心配し、私に聞いてきた。



大腸癌切除後の再発予防効果

私は2010年にロンドンの St George UniversityでDr.Sanjeev Krishnaの臨床試験に参加大腸癌患者のDorothy Bradshawに関する新聞記事を読んでいた。

記事にあったDorothyは大腸癌切除前にアルテスネイト(アルテミシニン誘導体)という新しい癌治療薬を2週間服用した。そして5年後も健康で存命しているということだった。

その臨床試験(無作為化試験)は手術を待つ20名の患者に対して行われた。患者の半数が手術前に2週間アルテスネイト(アルテミシニン誘導体)の錠剤を、残りの半数がプラセボを服用した。5年後、プラセボ群では6名(10名中)の患者に再発が見られたが、アルテスネイト(アルテミシニン誘導体)投与群では1名(10名中)のみに再発が見られた。またアルテスネイト投与群では死亡例はなかったが、プラセボ群では死亡例が3例あった。

Susanには、アルテスネイト(アルテミシニン誘導体)が手術後の癌再発を抑制する可能性があること。また、Dr. Dasが2015年に発表した論文で、膵臓癌、骨肉腫、肺癌、大腸癌、黒色腫、乳癌、卵巣癌、前立腺癌、中枢神経系、リンパ腫、白血病、腎臓癌など55の細胞株に対し阻害効果を示と報告していることを伝えた。

<http://jeffreydachmd.com/2016/02/artemisinin-our-ultimate-cancer-weapon-a-gift-from-china/>
Jeffrey Dach MDより抜粋。

ジェフリー・ダックMD

米国フロリダ州デイビーのTrueMedMDクリニックの医師・メディカルディレクター。
Office Address 7450 Griffin Road Suite 190, Davie, FL 33314 USA Phone 954-792-4663



アルテミシニン誘導体 アルテスネイトによる がん治療説明書

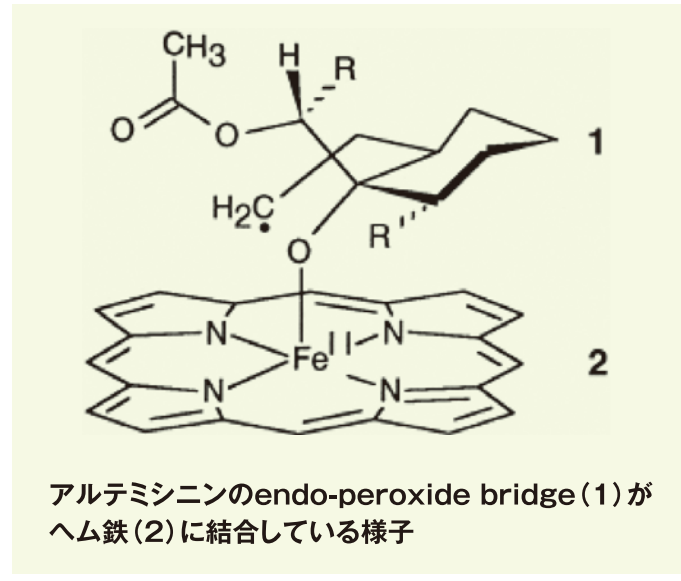


「アルテミシニン誘導体」アルテスネイト注射薬でのがん治療

●がん細胞がフリーラジカルに弱い特性を利用

がん細胞は、トランスフェリンレセプターを介したメカニズムにより、鉄を多く取り込んでいます。つまりがん細胞内には鉄イオンが多く含まれているのですが、アルテスネイトはその鉄イオンと反応して、フリーラジカルを発生します。一般にフリーラジカルはがんを発生させる原因とされますが、一方でがん細胞自体がフリーラジカルに弱いことも知られています。そのためアルテスネイトが投与されると、がん細胞が選択的に障害を受け、消滅するのです。

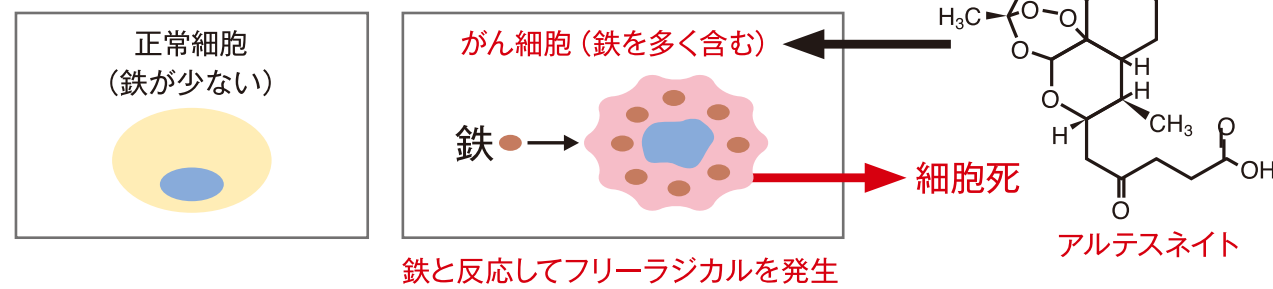
がん細胞内に鉄が多くあるのに比べ、正常細胞はあまり鉄を含んでいません。したがってアルテスネイトは、がん細胞に比較的特異的に細胞障害作用を示します。加えて、正常細胞にはSODやカタラーゼ、グルタチオン・ペルオキシダーゼといったフリーラジカルを消す抗酸化酵素が含まれていますが、がん細胞にはそれらがほとんど含まれていないため、がん細胞だけが消滅することになるわけです。



アルテミシニン誘導体アルテスネイト

誘導体(ゆうどうたい、英:derivative)は、有機化学の用語のひとつで、ある有機化合物を母体として考えたとき、官能基の導入、酸化、還元、原子の置き換えなど、母体の構造や性質を大幅に変えない程度の改変がなされた化合物のこと。

〈アルテスネイトの抗がん作用のしくみ〉



〈正常細胞とがん細胞の比較〉

	正常細胞	がん細胞
細胞内の抗酸化酵素量 (フリーラジカルから細胞を守るSODやカタラーゼやグルタチオン・ペルオキシダーゼ等の酵素量)	多い	非常に少ない
細胞内の鉄分含有量	少ない	非常に多い
酸化ストレスによる細胞障害 (アルテスネイトが鉄と反応してフリーラジカルを産生した際の細胞障害度)	少ない	非常に多い



アルテミシニンの発見者がノーベル賞受賞!

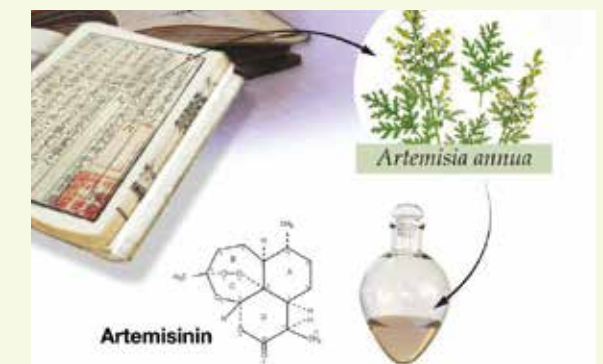
アルテミシニンを発見したトウユーユー博士(屠呦呦博士・中国中医科学院・北京)が2015年ノーベル医学・生理学賞を受賞しました。既に医学界のノーベル賞といわれるラスカー賞(アルバート・ラスカー医学研究賞)を2011年に受賞されており、重ねての受賞となりました。「伝統薬から開発された医薬品としては、20世紀後半における最大の業績」とある書物では表されているほど、医学においては重要な成果だと位置づけられています。ラスカー賞受賞・ノーベル医学・生理学賞受賞ともに中国人として初めてのことでした。



2015年ノーベル医学・生理学賞発表記者会見スライドの一番右が、トウ博士



トウユーユー博士
2015年度
ノーベル医学生理学賞受賞



(上図は、ノーベル財団プレスリリース資料より)

アルテスネイトの抗がん効果

アルテスネイトはさまざまながん細胞に対して抗腫瘍効果を示すことが報告されています。培養細胞や動物実験では、白血病、乳がん、肺がん、胃がん、肝臓がん、胆管がん、卵巣がん、子宮頸がん、子宮内膜がん、骨髄腫、膵臓がん、大腸がん、脳腫瘍、前立腺がん、咽頭扁平上皮がん、口腔扁平上皮がん、悪性黒色腫などに対する抗腫瘍作用が報告されています。臨床例での有効性を認めた症例報告も多くあります。



アルテスネイトについて

中国では古くから青蒿^{せいこう}というキク科ヨモギ属の植物が、解熱剤などとして用いられてきました。青蒿から分離されたアルテミシニンとその誘導体アルテスネイトは、現在マラリアの治療薬として世界中で使用されています。そして近年、アルテミシニンに抗がん作用があることが多くの研究で明らかにされてきました。

安全性について

抗腫瘍作用を示す投与量では正常細胞に対する毒性が低く、副作用がほとんどないという特徴を持っています。アルテスネイトは昔からマラリアの治療に使われていた生薬の成分で、安全性が高く副作用が軽度であることが確かめられています。